医史学と私
―日本眼科学史研究の回顧―

福島義一

日本医史学雑誌第三十六巻第三号
平成二年七月三十日発行

歳月の経つのは文字通り早いもので、私も近く傘寿の賀を迎えようとしている。しかし、振りかえると、恩師や学恩を受けた人たちはすでに逝かれ、同窓学友の多くも世を去ってしまい、ともに語る人の少なくなったことは淋しい限りである。しかし、私は幸い健康に恵まれ、今日でも学問の世界にひたり、またペンを執って原稿を書くことができるのは、まことに幸運な人生だと喜んでいる。

私は、あまり意味もなく医学の道に入り医師となったが、学生時代に古本屋で小川剣三郎著『稿本日本眼科小史』(明治三十七年)を購入した。この書をひもといてみて、日本人が失明と闘った歴史がずいぶん長いことを知り、その医学の源流が中国やインドにあることがわかった。その後、富士川游著『日本眼科略史』(明治三十二年)も読んだ。

昭和十年、当時の大阪帝大医学部を卒業して、中村文平教授の眼科学教室に入って医学研修の一歩を踏み出した。この頃、余暇に図書室でユリウス・ヒルシュベルク Julius Hirschberg（一八四三～一九二五）著『世界眼科史』を見出して読みふけった。

そして、個人で全世界の眼科史を書きあげた彼の絶大なエネルギーに感歎した。ところが、この眼科史を書きあげたヒルシュベルク氏史料蔵書の大部分が東京大学図書館にあることがわかり、私は再び驚いた。この世界羨望の的である貴重な史料が日本にある理由は、大正十年、東大名誉教授河本重次郎先生がドイツのヒルシュベルク氏から購入し、これを東

大へ寄贈されたのである（河本文庫と呼ぶ）。

それから、昭和五年、当時の千葉大学医学部教授伊東彌恵治先生が、ドイツ、ライプチッヒ大学医学部眼科学教授ザットレル（Sattler）父子旧蔵の眼科学関係図書約一万冊を購入して千葉大学医学部の所蔵に帰し、また、東洋医学関係の古医書約五千冊を、付属東洋医学研究室に集められた。

こんなことがわかってくると、当時わが国にはかなり多くの眼科史料が集まっていたが、史料として探査研究する人は非常に少なかった。

これに気付いた私は、この宝の山に入り、眼科史を専攻しようと試みたが、この宝庫は私を近づけなかった。ギリシア・ラテン・蘭・独・仏・英・中国各国語が読めなければ、史料の冠題すらわからない。

前記河本文庫も、目録と実在書とを照合してみると、かなり違っていた。目録にあっても、欠けているものが少なくない。貴重史料を抜いて送って来た疑いもある。幸い、千葉大学所蔵史料は、伊東先生の特別な知遇を得ていたことと、先生の後継者となられた鈴木宜民名誉教授（当時助教授）が中国眼科史を研究されていて、私とは同学の関係にあったので、眼科史研究にはたいへん便宜をはかっていただいた。

私は、初めは、江戸時代の日本眼科を代表した名古屋の馬嶋流眼科を調べ、続いて、「白内障をめぐる東西交流史」へと進み、さらに、「散瞳薬が日本へ来た道」へと研究を続けて行った。

私は、長く大阪府に在住していたので、中野操先生の杏林温故会には創立当初から参加させていただいたが、わが国では、官職を離れた個人が学問を研究することが如何に困難な事業であるか、中野先生の御生涯をしのんで痛感するものである。

前述『稿本日本眼科小史』の著者小川剣三郎先生の女婿黒沢潤三先生から依頼されて、先生が主幹されていた『実験眼科雑誌』に眼科史に関する雑文を連載したが、その内容は、主として、ヒルシュベルク氏眼科史原著をところどころ抄訳

したものである。

昭和十九年になって、私は、新設の県立徳島医学専門学校へ赴任することになり、大阪を離れた。出発にあたり、恩師宇山安夫（阪大名誉教授）先生から、先生が阿波徳島の御出身で、この地は古くは高良斎、明治時代では井上達也先生その他多数の銀海巨星が輩出した土地柄であることを教えられ、教授に、研究の余暇には、是非阿波の眼科人物誌も調べてくるよう申し渡されて、徳島の地を踏んだ。

さて、徳島の学校へ着任して、まず、シーボルトの高弟蘭学者高良斎（一七九九〜一八四六）先生の事蹟から調査に着手した。徳島市寺町本覚寺境内でその墓碑を見つけたが、御子孫は在住せず、図書館にも遺品遺著は何ひとつ保管されていない。県民の関心はまったく無い有様であった。終戦後、本覚寺住職から、九州福岡市にその御子孫がおられることを教えられ、すぐ良斎先生の遺品、遺著について問合わせた。ところが、その方は医学博士高太郎先生で、私と同じく眼科医であったので、非常に親切に御高配を受けることになった。

現在、高家には、良斎旧蔵眼球模型一具が伝わるのみであるが、他の御子孫の家にあるかもしれないので、判明氏名はすべて教えてあげようという教示を受けて、各家に問合せた結果、良斎史料は数年のうちにたくさん集めることができた（拙著『阿波の蘭学者』昭和五十七、参照）。ただ困ったことには、私がもっとも熱望している訳著『眼科必読』が見つからない。

この書は、良斎が長崎留学時代に蘭書から和訳したものであるが、その原典は、Johann August Tittmann（1774〜1840）: Lehrbuch d. Chr. zu Vorlesungen u.s.w. Leipzig（1800〜1802）である。そのチットマンは、一七七四年ハノーヴァーのビューラというところで生まれ、ライプチッヒ大学で医学を修め、外科医として有名になった。若干の著述があるが、ドイツ語で書いた前記外科学教科書はもっともひろく読まれ、その蘭訳本が長崎へ舶来され、良斎が本書の中から眼科に関する部分を訳述したのが『眼科必読』である。

後年この書を入手して読んでみると、チットマンの記述の他、師のシーボルトの所説や、良斎自身の治験例なども多数載っていて、その内容から考えると良斎著眼科学書で、本書を読まずしてシーボルト時代の日本眼科は語れないことを確認した。

それから、多くの日本人が体験したように、終戦後しばらく学問的空白時代が続いたが、昭和二十五年頃から眼科史研究を再開した。その動機は、昭和二年頃から金原書店が『大日本眼科全書』の発刊を企画し、昭和八年までに一五冊を刊行したが、その後戦争で中断していた。この頃になって『日本眼科全書全二十六巻』と改題してその完結をはかることになった。

そして、各項目執筆者の人選は日本眼科学会理事会が選定し、来る昭和三十一年中に発刊完了ということが発表され、私は日本眼科史を執筆するよう依頼を受けることになった。

当時は未だ戦災による復興も十分出来ておらず、史料の存否、所蔵者の住居不明も多く、焼け残った私蔵史料を中心として編纂にとりかかった。

名古屋市の馬嶋清則氏、小樽市の山賀勇氏、東京都の井上達二氏、中泉行正氏、金沢市の長岡博男氏諸先生（現在はすべて故人）には、家蔵の貴重な史料を貸与していただき、全国各地の大学の眼科学主任教授の教室史料提供によって、昭和二十九年七月二十日発刊『日本眼科全書』第一巻「眼科史」第一分冊『日本眼科史』はできあがった。私は、拙著の末尾に

なお、ペンを運ぶ中にも、失われた多くの史料を惜しむ思いが強かった。とくに、過ぎにし関東震災とこの度びの戦禍とは多くの貴重な史料を湮滅し去り、また、多くの史料所蔵家を行方不明にしてしまった。

なんとかして、現存の日本眼科史史料でも、これを安全な一堂に蒐集保管して置くことが出来ないものだろうか？（たとえば、日本眼科史史料室、出来れば医史博物館眼科史室の出現！）この様な念願を抱きつつペンをおく。

一九五三年六月九日

と感想を書いた。

昭和五十年になって、当時長崎大学医学部教授高久功先生から、昭和五十一年日本眼科学会創立八十周年記念式典を挙行するが、その席で日本眼科学史に関する記念講演をやっていただけないかという依頼を受けた。翌年昭和五十一年三月十三日式典に続いて「日本眼科学史から観た長崎、とくに、シーボルトを中心として」と題して記念講演をさせていただいた栄誉は忘れ難い。

この頃から、日本人医師の多くが海外に新知識を求めて欧米諸国へ留学するようになった。この人たちの中には、あらかじめ留学先の大学や研修施設の歴史を調べて行く人もあれば、反対にせっかく長期間史上有名な施設で研修しながらその歴史を識らずに帰国する人もいた。また、欧米学者の中には、中世日本眼科の主流を成した馬嶋流眼科について研究のため来訪される人や、ノーベル医学賞は受けられなかったが、色覚検査表の発明者、石原忍先生（東大名誉教授）の事蹟を求めて来訪される方もいた。

私は、前述『日本眼科史』刊行後三十余年経ったので、その後発表した眼科史関係の論著をとりまとめて、昭和六十二年『眼科学史の窓』を刊行した。

本書の内容は一〇項目に分け、Ⅰでは日本医学の立場から、主として各国発行の切手を提示しながら近代眼科学の成立過程を解説、Ⅱでは散瞳薬をとりあげてその発見史と日本伝来過程を述べ、Ⅲでは日本における白内障の研究史を概述、Ⅳではわが中世眼科を代表する馬嶋流眼科の成立過程とその内容を詳述、Ⅴでは過去に恐れられた風眼について中国医学と日本医学両立場から文献的検討を加え、Ⅵ眼鏡の発明とその日本伝来過程、Ⅶ、Ⅷは日本眼科史の立場からシーボルト業績の検討、Ⅸは私の身近かに史蹟のある人物の評伝、Ⅹ（最後の章）は生来歴史趣味に生きる私が休日を利用して杖をひいた史蹟の雑記録から成立っている。

この書は、医史学関係者以外からも購入申込みが多く初版は品切れとなってしまった。最近は眼科史に関心を抱く人たちもずいぶん多くなったようだ。

（日本医史学会評議員・日本眼科学会名誉会員）